

幼児の言語研究(三)

——幼稚園児の話しコトバにおける動詞の実態——



◇はじめに

前号では名詞の実態について述べましたが、ここでは、話しコトバにおける動詞の実態はどうなっているのかを三歳児、四歳児、五歳児それぞれ五名ずつについて分析した結果をもとにして、その傾向や発達段階からみた特徴点などを考察してみたいと思います。

まず大きく分けると、

- (1) 文法的な面からみた場合の特徴点
 - (2) 語彙的分类による傾向について
- 以上二つの点からみていくことにします。

表1 年齢別使用動詞総数(30分間)

5 歳 児		4 歳 児		3 歳 児	
153.4	I 児	152.7	K 児	100.0	I 児
150.7	M 子	74.3	K 子	80.7	M 子
168.6	H 子	145.3	Y 子	124.7	H 子
297.5	H 児	191.0	T 児	123.6	H 児
208.1	S 児	166.5	I 児	202.0	S 児
195.7	平均	146.0	平均	126.2	平均

西ノ内 多 恵
伊 東 照 子
村 田 和 子

一、動詞の使用数

三十分間における平均使用数は、上の表にみられるような結果が得られた。年齢と共にかなり増加しているのが分かる。ここでの五歳児は、追跡研究によるため三歳児と同一人物であることをつけ加えておく。(表1)

二、使用順位の高い動詞

表2 動詞の使用順位

順位	5 歳 児	4 歳 児	3 歳 児
1	行く(205)	やる(184)	する(68)
2	する(203)	する(158)	言う(57)
3	作る(112)	なる(126)	やる(53)
4	いる(100)	いる(115)	ある(30)
5	やる(74)	ある(102)	なる(25)
6	言う(65)	作る(91)	行く(23)
7	来る(52)	できる(90)	来る(21)
8	なる(31)	行く(80)	寝る(20)
9	取る(29)	言う(79)	作る(19)
10	急ぐ(27)	貸す(76)	見る(18)

注：()内は使用数をあらわす。
3歳児のみは資料の関係で録音1回分のみの数字である。

表をみると、対象の存在を表わす「ある」「いる」対象の変化を表わす「なる」、主体の動作を表わす「やる」「する」「行く」「作る」などが共通して多く使用されている。

国立国語研究所の語彙調査によると、昭和二十八年と二十九年の一年間の総合雑誌の延べ語数九百万語のうち、上位順にみると①する、②いる、③いう、④こと、⑤なる、であり、昭和三十一年の一年間の雑誌九十種の延べ語数一億六千万語のうち上位順にみると、①する②いる③いう④一⑤こと、となっており、動詞の順位を総合すると①する②いる③いう④なる⑤ある⑥来る⑦みる

表3 活用別による使用数

	五段	下一	上一	サ変	カ変
3 歳 児	75.9	21.9	13.9	10.1	4.4
4 歳 児	91.0	21.7	18.8	10.8	3.6
5 歳 児	117.1	33.1	13.5	13.2	6.0
合 計	284.0	76.7	46.2	34.1	14.0

(注：3回平均)

通している。

四段活用は、動詞の中でも古いかたちの動詞であると言われており、これが多いということは、おとなの言語生活において五段活用が多いことを示しているであろうか。

四、動詞の活用形が多いか

次の表4は三十分間の平均使用数を出したものである。これによると共通して連用形が最も多く使用されている。連用形の音便及び接続助詞につながるものがその多数を占めており、接続助詞を使って、短文であった言語表現から、長い文章形式をとっての

⑧思う⑨行く、である。これらはおとなを対象にした書きコトバではあるが、表2と比較してみると非常に共通していることがわかる。

三、動詞の活用別使用数

三、四、五歳児に共通して、圧倒的に五段活用が多く、次いで下一段活用、上一段活用の順となっており、カ変が最も少ないのも共

表4 動詞の活用形別使用数

	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
3 歳 児	17.8	72.4	16.0	16.3	2.2	2.1
4 歳 児	16.4	63.5	20.7	18.5	3.0	1.9
5 歳 児	20.4	100.7	26.0	12.5	2.7	6.5
合 計	54.6	236.6	62.7	47.3	7.9	10.5

言語表現をしようとするのがわかる。

命令形、仮定形が少ないのは言語の発達とどう
五歳児に少ないのは言語の発達とどう
かかわっているのか興味がある。

五、複合動詞について

普通の動詞に比べてかなりおくれ
発達するといわれており、ここでも年
齢と共に複雑な語が使われているのが
わかる。五名の被験児が使用していた
ものをあげると、

(1)三歳児では、「歌い出す」「振りか
える」「着替える」「出っ張る」「思
いつく」「出かける」「ぶっとば
す」「飛び込む」「持ち上げる」「探し出す」

「積み込む」「取り替える」「逃げ出す」「出しやがる」「作
りやがる」など、

(2)四歳児では、

「取り替える」「追いかける」「組み立てる」「でき上がる」「
踏みつぶす」「押し出す」「落っこちる」「引っ張る」「や

り直す」「やり上げる」など、

(3)五歳児では、

「はね返す」「ぶちこわす」「差し込む」「追いつく」「飛び
込む」「取り替える」「追いかける」「吹き込む」「切り離
す」「切り替える」「踏みつぶす」「ぶっとばす」「でき上
がる」「飛びかかる」「行き過ぎる」「飛びかえる」「おし込
む」

などで、いずれも男児に多く使用されているのが特徴的であ
る。

六、動詞の分類

子どもたちが使っている動詞の内容や傾向を考察するため、使
用的に動詞の分類項目を設定してみた。これは名詞の分類の際に
参考とした Allen Walpole の分類項目及び教科研国語部会発行
による「語彙教育」の動詞の項を参考とし、併わせて、専修大
学・中田武司先生並びに国立国語研究所・大久保愛先生の助言を
いただきながら、自分たち三名で作成したものである。

まず、動詞を動作性をあらわすものと、状態性をあらわすもの
とに二大別した。動作性をあらわす動詞をさらに次の五項目に分
類し、次のように概念規定した。

I 動作性をあらわす動詞

①人間関係、その動詞に人間関係及び社会性の要素が含まれているもの。

②認識・思考、その動詞に知的な活動の要素が含まれているもの。

③行為・活動、その動詞に主体の行為・行動をあらわす要素が含まれているもの。

④生理・感覚、その動詞に人間としての生理的欲求及び感覚・感情性の要素が含まれているもの。

⑤自然現象、その動詞に天候や自然界の事象をあらわす要素が含まれているもの。

II 状態性をあらわす動詞、主体の行動ではなく、客体化できる状態性を含むもの。

表6 4歳児の動詞分類表

表5 3歳児の動詞分類表

注○内は使用数をあらわす

K	動	人間関係			人間関係		
		遊ぶ③	手伝う①	くれる①	あげる⑤	もらう①	くれる①
児	認識・思考	書く⑦ わかる⑥ 見る⑥	知る④ 考える③ 言う②	読む① 覚える① 見つける①	教える②	遊ぶ①	要る①
	行為・活動	やる② 作る④ 来る② 入る② 持つ② 使う②	つける② 馳つなげる① 置く① 置く① 飛ぶ① おさえる①	変え合わせる① 合行は入る① ずれる① こ重ねる①	する①⑦ や行く①④ 持つ⑥ 集める④ 入る④ 上げる④ 置く③ 出す③	歌走る② 並ぶ② 転がす② 来る④ 転ぶ④ 飛ぶ④ 乗る③ 乗る③	取探す① やめつめる① 住まける① 倒れる① つかまる①
	生理・感覚	寝る⑤	びっくりする①		食べる②	あがる①	くたびれる①
	自然現象				寝る②		
児	状態性	なる⑬ ある⑭ いがる⑧ ちがう⑦ できる⑦	倒れる⑤ こえる② 落ちる① 落ちる① 飛べ①	ぶつかる① わかる① なる① なる① なる①	飛ぶ③	沈む①	いる① 入る① 走れる①
	状態性						
子	人間関係	遊ぶ③			待つ④	買う①	もらう①
	認識・思考	考える①			あげる③	書く③	知る①
	行為・活動	やる⑫ 作る⑫ 行く⑦ 行く③ 渡る② 飛ぶ①	置く① やめる① 抜かす①		来る⑦ する⑦ やる⑦ 切る⑥ 作る⑤	持つ③ 煮れる② 煮る② 脱ぐ② 取る②	婦敷く① 通す① 弾く① やめる① やめる① そえる①
	生理・感覚	寝る①	飽きる①		びっくりする②		
子	自然現象				暮れる③	鳴る①	
	状態性	ちがう⑤ 余る② いる②	できる② 倒れる① はいれる①	なる①	なる④ いる③ できる③	さがる① ある① 違う①	

使用数

5 歳 児					
I 児	M 子	H 子	H 児	S 児	合計
10.0	14.7	10.3	19.3	24.0	78.3
17.0	19.7	18.0	6.0	4.7	65.4
86.0	108.0	173.0	97.0	97.3	561.3
4.7	0.7	0.6	3.7	7.3	17.0
0	0.7	1.3	0.7	0.7	3.4
35.7	64.3	94.3	24.7	35.3	254.3

これらの分類
項目に当てはめ
て年齢別に作表
してみた。紙面
の都合もあり各
年齢二名ずつと
し、録音一回分
(三十分)に使用
した語彙のみを

表にした。
表8は項目別による使用数の一覧表である。これらの表からみて、特徴的なことを挙げると、
①人間関係をあらわす動詞は、名詞の場合のそれに比べ少ないのが目立つ。これは人間関係の広がりや停滞を意味するものではなく、動詞総数とこの項目に該当する語彙の比率との関係によるものであろう。
②認識・思考の項をみると四・五歳児よりもむしろ三歳児において量的に増加しているのは何を意味しているのであろうか。さ

表7 5歳児の動詞分類表

I 動	人間関係		
	あげる⑤ もらう④	くれる③ 待つ②	借りる①
作性	認識・思考		
	みつける⑥ 言う⑤	知る② 見る②	数える① 教える① わかる① 教える①
作性	行為・活動		
	する⑦ 作る⑧ 行く⑦ やる⑦ 取る⑦ つける⑤ 来る④ 入れる④ 頑張る④ 持つ③ こわす③ 切る② 揃える②	帰る② わける② 並べつ② 立ふく② 取る⑥ つける① 向く① 勝つ① 向いた① すう① かまう① 負ける① とらる① 決める①	追いつく① いる① めぐる① なせる① 見逃す① 逃げる① つける① まわる① うまわす① 込む① はさむ① 置く①
児	生理・感覚		
	食べる①		
性	自然現象		
状態性	状態性		
	なめる⑬ 見る⑧ 別れる⑦ ある⑤ 開く② ちがう②	できる⑧ つかれる⑦ ひかなる① つとれる②	おはする① 出る① 足りる① こわれる① つづく①
M 動	人間関係		
	遊ぶ⑤ 貸す③	あげる② もらう②	待つ①
作性	認識・思考		
	言う⑥	わかる①	見る①
作性	行為・活動		
	作る⑯ やる⑯ 取る⑯ 出す⑧ 使う⑦ 置く⑤ 行く④ 来る④	かぶせる④ 閉めつける④ 持つ③ 片づける③ 入る② 煮る② はさむ① さく① はく① 帰る①	① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ①
子	生理・感覚		
	寝る①		
状態性	自然現象		
	鳴く①		
状態性	状態性		
	いる⑬ できる⑥ これる④ なる④ たまる④	ある② がう② 作れる① こける① こわる①	② ② ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ①

表8 項目別動詞

分類項目	3 歳 児						4 歳 児						
	I 児	M子	H子	H児	S児	合計	K子	K児	Y子	T児	I児	合計	
動作・作用をあらわすもの	人間関係	10.0	9.0	5.0	4.0	11.0	39.0	4.7	5.7	11.7	33.5	25.0	80.6
	認識・思考	22.0	21.0	7.0	8.0	44.0	102.0	5.3	22.7	11.7	13.5	13.0	66.2
	行為・活動	98.0	54.0	65.0	52.0	92.0	361.0	43.0	63.0	77.0	85.0	61.5	329.5
	生理・感覚	6.0	2.0	35.0	3.0	0	46.0	2.0	5.3	5.7	2.5	3.0	18.5
	自然現象	4.0	4.0	6.0	2.0	9.0	25.0	1.0	0.7	0.3	0	0	2.0
状態をあらわすもの													
		19.0	14.0	17.0	32.0	34.0	116.0	18.0	55.3	38.7	57.0	64.0	233.0

(注：4.5歳児は3回平均数であるが、3歳児は資料の関係から1回の数字である)

まざまな事物に興味をもち始め知ろうとしていくためとも考えられる。

③行為・活動は、分類上最も多い項目であることは共通しているが、五歳児において飛躍的な増加を示しているのは、言語発達の過程を示唆しているように思われる。

④生理・感覚に属するものが非常に少ないのは、形容詞・形

容動詞の中に多く含まれているためもあるだろう。

⑤次に「状態性」の項目に分類できる動詞は、動作性の中のもの「行為・活動」に属する動詞群に次いで多い。動作性と状態性の割合を三歳児で見ると五七三／一六で約五対一になっているが四歳児でのそれは約二対一と急激に、状態性に属する語彙が増している。五歳児においても同じ傾向を示している。

三歳児段階では「なる」「できる」「ある」「いる」「違う」など、せまい範囲の客体化にとどまっているが、四、五歳児になると、かなり生活経験も拡大してくるので、さまざまな日常における状態を認識できるようになり、従って、言語においても急激な広がりとなってあらわれるのであらうと思われる。

一回目録音分析から四、五歳児の状態性初出語を拾ってみると、

◇四歳児では、

「余る」「出る」「取れる」「はいれる」「動く」「飛べる」「落ちる」「ぶつかる」「重なる」「つなげる」「聞こえる」「終る」「光る」「曲がる」「はずれる」「乗れる」「まわる」「使える」「切れる」「狂う」「やりあげる」「困る」「過ぎる」「溶ける」「ひっくり返る」「経つ」「当たる」「で上がる」

表9 初出語一覧表（録音1回分のみ）

	分類項目	4 歳 児	5 歳 児
動 作 性	人間関係	配る 借りる 射つ 与える 渡す	助ける だます 返す
	認識・思考	試す 覚える 考える 読む 決める	数える 見つかる 教える
	行為・活動	渡る 抜く 放る 合わせる 乗る 吊る つなぐ 頑張る ねらう おさえる すべる ぶつかる 曲げる 拾う 抜かす 積む はずす 片づける つなげる 焼く 重ねる つかまる	決める 消える 突く せめる かぶる のぞく かまう くずれる なくす 勝つ はさむ はたらく 負ける 坐る 折る 守る 閉める とらす しまう 生きる なおせる 逃げる 拡げる 呼ぶ 貯める 黙る 割る 拭く
	生理・感覚	飽きる	かわく、疲れる
	自然現象	降る	鳴く

などが三歳児には見られなかった動詞として使われている。
◇五歳児では、
「別れる」「開く」「続く」「なおる」「つながる」「ひかれ
る」「変わる」「だまる」「崩れる」「消える」「忘れる」「作れ

る」「上がる」「なおせる」「こげる」「これる」「くつつく」
「間違う」「ふめる」「かかる」「焼ける」
などである。

次に、各自について一回分のみの資料に基づいて動作性による
初出語を拾って表にしてみる（表9）。一回分のみの比較なので、
厳密に四歳児、五歳児の初出語とは言えないが、動詞の使用の範
囲の広まりを見る一つの手がかりとなり得ると思う。

以上、ごく大きっぱに三歳児、四歳児、五歳児の各五名ずつの
資料に基づいた動詞の実態について考察して来たが、分析、追求
が浅くて不十分な考察しかできなかったように思う。予想以上に
大変な時間のかかる作業なので、被験児の数も限定されてしま
うが、得られた結果が一般化できるように、対象児の数を増加して
目下その整理に取りかかっているとこである。

さらに今後の課題として、使用語の数だけでなく、内容面での
もっと深い考察が要求されることと、この研究が実践の場に役立
つようなものにしていきたいと思っている。

（白梅学園附属幼稚園・伊東照子記）